

1968年の沖縄

復帰前の沖縄を描いたドキュメンタリー作品

糸満の女

11/18 (金)

沖縄県立博物館・美術館
美術館講座室



歌の国、
恋の島
八重山

海燕社の小さな映画会 2016

日 時:2016/11/18(金)
場 所:沖縄県立博物館・美術館 美術館講座室 (1F)
時 間:17:45開場、18:15開始 (19:45終了)
※途中入場はできません。
料 金:1,000円(要予約)
※先着順、定員に達し次第、締め切らせていただきます。
電 話:098-850-8485(海燕社/カイエンシャ)

歌の国、恋の島 八重山 (モノクロ/モノラル/25分/1968年作品)

1968年、日本復帰4年前のことだ。僕は日本政府発行のパスポートまがいの身分証明書を持たされ、はるばる八重山へとやって来た。地元の身元引受人がなければ入ることの出来ない別天地だった。

八重山は、米軍基地のある沖縄本島と違って、静かで古風な匂いのたちこめる島だった。

裏石垣にはひっそりと開拓村が点在したが、そこには大人たちの姿はなかった。子供たちだけが走りまわって遊んでいた。大人は畑や牧場へ働きに出ているのだろう。

開拓村を見ているうちに、話を聞いていた人頭税に縛られた17世紀の農民の世界へと引き込まれていった。非道な道切り移民で新村を次々と建てさせられたあの開拓村だ。喜舎場永殉翁は、その昔を今のように怒りをこめて熱っぽく語った。薩摩と沖縄の奴等が八重山に何をしたか、と。

この作品は、旅番組として依頼されて来たのだが、興味は移民政策に振り回され牛馬の如く働かされたかつての八重山農民

への思いにひきずられて行った。

したがって、この作品には、於茂登山も底地ビーチも川平湾の景勝地もない。桃林寺や宮良殿内などの文化遺産もない偏頗な旅番組になったのだ。

糸満の女 (カラー/モノラル/27分/1968年作品)

この作品は1968年に製作されたが、一度テレビ放送されただけで長い間眠っていたものである。

元はフィルムであるが、数十年の歳月に原版は傷み果て、今では傷ついたこの映像だけしか残ってはいない。

当時、私は製作スタッフとともに、男は海へ女は畑へ、あるいは男が魚を獲り、女がそれを売るといったようなシンプルな暮らしをさがしていた。複雑化した現代社会では、そのような基本形態が殆ど見られなくなっていたからだ。そんな古拙な社会には失われた祈りがあり、愛があった。ある意味でこの作品は糸満に対する私たちの思いを描いたものであり、したがってナレーションなども現実にはそぐわない表現があるかも知れない。私は、海を仲立ちとした男と女の生が、墓という死の家へ収斂されてゆく、そんな形を見ていたのである。ドキュメンタリーとしては独断と偏見に満ちた思いの先行する作品であるが、その映像はまごうかたなく1968年の糸満の姿をあらわしている。

「糸満の女」というタイトルを見れば、元気いっぱいの若く美しい糸満女が登場すると思われるかも知れないが、残念ながらその期待にも応えることができない。

監督 野村岳也